

学習の土台を育成

「習字の筆っこ」「美文字キッズ」



美文字キッズでは公立小学校から要請を受けて「美しいえんぴつのもち方かき方教室」を出前授業することもあるという(写真は昨年7月、山形県飯飯町立第一小学校で特別授業をする高木代表)

立志塾を運営する株式会社シルヴァンブリーズの幼児から対象にした「習字の筆っこ」(習字)、「美文字キッズ」(硬筆)は、全国に66教室展開している。習字の指導は、先生の力量に依存するところがある。しかし、同社は人に依存しない形を作った。

「指導経験がない人でも指導ができるモデルにすることがポイントのひとつでした」と高木悦夫代表取締役は話す。

塾では、イベントにも力を入れている。

「習字の先生だけでなく、イベントに塾の講師がしっかりと関わることが大切です。そうすることで、子供たちや保護者の方とコミュニケーションが取れる。アナログなことです。そうすることで塾のことも知ってもらえるのです」と高木氏は言う。

しかし、「筆っこ」「美文字キッズ」がもたらす効果は、経営だけに限らない。

「例えば、東大生は考えるのが先で、考えと字を書くスピードが追いつかなくて字が汚いと言います。しかし、それは一部の人だけであって、やはりノートにアウトプットする字が汚いと思っても汚くなりません」と高木氏は述べる。

途中式の計算を書く際も綺麗に書けるようになるこ

とは、思考の整理にも繋がるのだ。

高木氏はこう続ける。「また、字を美しく書くというを通して、きちんと物事を最後までやる精神性を学べるのが最大のメリットです。人が成長できるポイントには緊張感です。習字は失敗が許されないの、程よい緊張感の中で集中力が養われます。これがその後の学習に与える影響力は子供たちにとつてかけがえないものだと思います」

塾が習い事のコンテンツを導入することは、中学講座への接続だけでなく、学習の土台を作ること

をもちたらしめてくれるのだ。



シルヴァンブリーズが運営する立志塾で発行しているニュースレターには、塾の本科の情報と併せてキッズコースの情報も掲載。未来の生徒たちに向けても情報発信を怠らない。